

## 思考を言語化する教室活動 ー「総合活動型日本語教育」のタイでの実践ー

松井孝浩

### 1. はじめに

本稿は早稲田大学日本語教育研究科細川英雄先生が提唱する「総合活動型日本語教育」（以下「総合」とする）のタイにおける実践報告である。筆者の勤務するシーナカリンウィロート大学日本語科主専攻および副専攻4年生の聴解・会話授業において、日本語科学生と当大学の日本人留学生が「日本語と私」「〇〇と私」というテーマでレポートを書く過程でのインターアクションを通じて、4技能の向上と文化リテラシーの育成を目指すという活動を実施した。

### 2. 「総合」を実践するまでの筆者の問題意識と自己の授業の振り返り

教室内での活動ではすらすらと話すことができる学習者と教室以外で話をしているときに予想以上に会話に苦勞し「あれ？」と感じたり、作文などはすばらしいものを書いてくるのだが、それについて話をさせようとするとうまくいかないなどといった経験をしたことはないだろうか。日常の授業の中で筆者が感じたこのような戸惑いや疑問は何が原因となっているのだろうか。またそれに対し教師は何ができるのだろうか。筆者はこのような問題意識を持ちながら、様々な教室活動を行ってきた。以下は筆者がこれまでに実施してきた教室活動の反省点である。

- ・ ロールプレイ — 既成教科書で設定されている場面をタイで遭遇しそうな可能性があるものに作り変えると、非常に限られたものになる。また、教師がいくら工夫したものを準備しても、それが仮想のものである以上、回数を重ねると学生の意欲が下がってしまう。
- ・ スピーチ発表 — 学生は暗記してきたことを話すだけとなり、その後の質疑応答を加えても、学生数が多いクラスでは有効なインターアクションが発生しにくい。
- ・ 劇発表 — 劇中で会話のやり取りはあるものの、やはり暗記中心のやり取りになってしまう。
- ・ ビジターセッション — 参加者との実際の情報のやり取りが行われ、学生は意欲的に取り組むものの、なぜその場でそのこと（筆者の授業の場合、タイの大学での制服着用の是非など）を参加者と話さなければならないのかという必然性がなく、また1回限りのセッションではなかなか打ち解けて話し合うことができない。

先に挙げた疑問と戸惑い「教室内での活動ではすらすらと話すことができる学習者と教室以外で話をしているときに予想以上に会話に苦勞する」「作文などはすばらしいものを書いてくるのだが、それについて話をさせようとするとうまくいかないなどといった経験」の原因を上記の教室活動の問題と照らし合わせて考えると、以下のような問題点が挙げられる。

- ・ 実際の状況の中での会話
- ・ 学習者の「言いたいこと」への注目
- ・ 有効なインターアクションの少なさ

つまり、今までの授業では実際の状況の中で学習者の言いたい事に注目し、それをやり取りするという練習が行なわれてこなかった。では、このような問題点を克服するにはどのような授業をしたらよいのだろうか。

### 3. 「総合」とは何か？

一昨年の早稲田教育セミナー「言葉と文化を結ぶ日本語教育」で「総合」について知り、自分の担当する授業で実践を行うことにした。「総合」についてはその方法論を一部紹介するのみに留め、詳細は細川（2002）をご参照いただきたい。

こうした総合的な言語活動は、常に当面の具体的な対照と目標を前提にして機能するものであり、決して抽象的な架空のものとして行われることはない。（中略）こうしたいくら技術的なノウハウを習っても、必要な文型練習を施されても、結局は、本人のその問題への興味と関心がなければ、それまでのことなのである。（中略）したがって、従来のように、架空の言語場面を想定して、それを訓練させる、いわばバーチャル・リアリティ（仮想現実）の日本語学習から、学習者自身にとって具体的な目標を持った活動を軸に、その活動への明確な意思を発信する日本語教育へと教育のパラダイムを転換させることがこれからの言語教育の方法論として求められていると言えよう。（p. 188-189）

そして、この「総合」の具体的な方法として早稲田大学日本語教育研究教育センター（2002）では以下のように説明されている。

活動内容 現在、学習者が興味・関心を持っている問題をテーマとし、その問題と自分との関係について「〇〇と私」というタイトルでレポートを執筆する。まず、自分のレポート執筆の動機をクラスで述べ、意見をもらう。その動機をもとに、「私にとって〇〇は何か」という仮説を立てる。さらに、この仮説をぶつける相手を探し、ディスカッションを行なった後、その報告をクラスで行なう。動機・仮説・ディスカッションを踏まえ、自分の結論を出して、下書きを完成

させる。各自の成果について、相互自己評価を行なった後、全員のレポートを冊子にまとめる。  
(p. 20)

また、今回の実践の主な目的である「文化リテラシー」については細川（2002）で次のように述べられている。

つまり、情報としての「文化」表象を自らの認識として捉え、その認識を判断に変えて、他者に向けて記述し、それが他者とのインターアクションを経てもう一度自らに戻ってくるとき、情報としてのモノ・コトを、自分の知識として体得することになるのである。その円環プロセスを支えるものが、能力としての「文化」であり、それを「文化リテラシー」と呼ぶことができるといえよう。（p. 183）

筆者はタイにおいて遭遇するであろうさまざまな場面に対応できる能力を育てるよりも言いたいことがいえる、つまり思考を言語化できる能力を中心に育成すべきだと考えている。それは、いくらさまざまな場面に対応できる表現を教えても、それにあつた場面に実際に出会わなければ役に立たないからである。日本であればそのような場面に遭遇することも多いと思うが、海外ではそのような場面は少ない。それより一人の人間の話すことをよく聞いて、それに対して自分の言いたいことが言える能力を育成すべきではないかと思う。そしてそのためには「文化リテラシー」の育成が不可欠である。このような意味においても「総合」の理論と方法が自分の授業における問題点を克服するために有効なのではないかと考えた。

## 4. 実践の概要

### 4.1 目的

4 技能の向上と文化リテラシーの育成。他者のメッセージを的確に理解し、それに対して自分の言いたいことがいえるようになる。つまり、思考が言語化できるようになる。

### 4.2 カリキュラム全体の中での位置づけ

4 年間の日本語学習の総まとめとして、聴解・会話の授業で実施した。また作成したレポートは文集として1冊の本にまとめ、記念に残るような形にした。

### 4.3 授業全体の流れ

このようなレポート作成は学生にとっても初めての試みだったため、その構成は担当者（筆者）がデザインし、1回の授業にレポートの各構成段階についてディスカッションをさせ、それを毎週宿題として原稿用紙1枚程度にまとめさせることにした。1回目レポートのタイトルは時系列に事実を並べていけばまとまった文章が書けるのではという考えから「日本語と私」というタイト

ルを担当者が設定した。2回目のレポートは「〇〇と私」とし、学生に書きたいテーマを選ばせた。宿題はそれぞれ4回分書き終わったところで、担当者が個別にフィードバックを行ってから、ひとつのレポートにまとめさせた。詳細は以下の通りである。

#### 4.3.1 実施クラスの概要

実施クラス： 主専攻4年生35名（中級）、副専攻4年11名（初中級）

期間と科目： 2005年度後期 聴解・会話授業

参加日本人： 主専攻4年生6名、副専攻4年2名（当大学タイ語コース、交換留学生など）

作文テーマ： 前半11、12月（計8回） 「日本語と私」（スタディーヒストリー）

後半 1、2月（計5回） 「〇〇と私」（自由テーマ）

#### 4.3.2 毎回の授業の流れ

授業時間： 3時間

前半： 「なめらか日本語会話」を使った話し言葉を中心とした会話授業。

後半： 1) 日本人留学生を含む5・6名のグループを作る。宿題の読みあわせの後、わかりにくい部分があれば相互に意味を確認する。また、「〇〇と私」は学生に選んだテーマ（家族・趣味など）ごとにグループを作った。  
2) 前回の宿題のテーマを発展させた形で今日のテーマを担当者が説明。必要に応じてディスカッションで使用するハンドアウトを配布。  
3) 今日のテーマについてのディスカッション。担当者は各グループを回って、テーマに沿ったディスカッションが行われてるかモニターし、必要に応じてこれに参加する。  
4) 授業終了後、話し合われた内容をもとに自分の考えを原稿用紙1枚程度にまとめ、来週の授業時に持参する。

#### 4.3.3 毎回の授業で行われたディスカッションのテーマ

「日本語と私」 1) 日本語を勉強する前 初めて覚えた日本語、日本についてのイメージ

2) 日本語に勉強ついて 日本語を勉強して楽しかったことなど

3) 日本語を勉強した後 日本語を勉強して何が変わったか

4) 将来について 今後、日本語とどのように関わっていききたいか

「〇〇と私」 1) どうして〇〇について書くのか 〇〇を書く動機について

2) 私の経験 〇〇についての具体的な経験

3) 友達の意見 私の経験についての友達の意見

4) 私の意見 私にとって〇〇とは・・・です

## 学生が選んだテーマ（後半）

- 家族に関するもの : 兄と私、おばあさんと私、父と私、兄弟と私、母と私、妹と私  
友達恋人に関するもの : 初恋と私、いとしい人と私、失恋と私、Pちゃんと私  
趣味に関するもの : ギターと私、サッカーと私、旅行と私、映画と私、かばんと私  
学校に関するもの : 幼稚園と私、BCCと私、St.Maryと私  
その他 : 時間と私、愛と私、ダイエットと私、女らしさと私、ドイツと私

## 5. 評価の方法

細川（2004）では、評価の例として、事前に授業の参加者全員で指標を設定し、書いた作文については学生が相互に評価を行い、それを満たしたものは全員が80点を取れる評価方法を提案している。しかし当大学では学生全員にAを与えることは不可能であり、また学期内の中間、期末試験ではペーパーテストを実施しなければならない。よって全3時間ある授業時間のうち前半1時間半を「なめらか日本語会話」をもとにした授業を行い、定期試験の記述と聞き取りの部分をこの教科書の内容から出題し、会話の部分だけをレポートについて担当者が学生一人一人にインタビューテストを行った。また、学生が書いたレポートについては、オリジナリティー、インターアクションの受容、論理の一貫性、字のきれいさの4点を評価基準とする評価シートを作成し、学生に相互評価を行わせた。この相互評価の配点は科目全体の20%とした。今回はやむを得ぬ事情によりこのような方法をとったが、評価方法についてはさらなる検討が必要である。

## 6. 授業の反応

### 6.1 担当者の観察から

この実践中はできる限り授業中に感じたことをその場でメモをとることにした。

1月19日：内容ベースなので、成績があまりよくない学生でも注目を浴びるチャンスがある。

従来のロールプレイなどの授業では、あらかじめ決められた場面があるため、学習者はその状況下において適切だと思われるやりとりを行なう。つまりある程度「正しい答え」にそったやりとりが行なわれるということである。その場合、やはり日常的に成績のよい学生は意欲を持って取り組むものの、自信がない学生はなかなか積極的に参加する事ができなかった。しかしこの授業で話されることは、伝えたい内容が中心であり成績に関係なく自己表現ができる。これによって、「伝わった」という実感を参加者みんなが感じる事ができたと思う。

1月26日：学生は表現困難であると思われた内容をタイ語で話している。

この授業で話されることは「言いたいこと」が中心であるため、それが困難であると思われる時にはしばしばタイ語でのやりとりが見られた。日本人留学生もタイ語ができるため、この表現は日本語でどのように言ったらよいのかという質問をタイ語でしている学生もいた。担当者としてはつたないながらも日本語でのインターアクションを通して伝えたいことが日本語で言えるような活動になればと考えていたが、この場では日本語を話すようにという指示をしなかった。回を重ねていくうちに、日本語でのやり取りが増えて行けばよいと考えたからである。実際は日本語でのやり取りが増えたかどうかはグループによって大きな差が見られた。

## 6.2 授業中の質問から

1回目のレポート「日本語と私」の3回目は「日本語を勉強して変わったこと」についてディスカッションを行なった。日本語を勉強して変わったことを生活、性格、行動、考え方の4つのカテゴリーに分けて意見交換させたが、ある学生から「日本人はタイにいて、タイ語を勉強しているのだからいろいろ変わることはあるが、私たちはタイにいて日本語を勉強しているのだから変わったことない。」という意見が出た。ディスカッションにこのようなテーマを設定した意図は、4年間の日本語学習を振り返り、最終的に「私たちはなぜ外国語を学ぶのか」ということについて日本人、タイ人相互の意見交換を計画していたからである。その前段階として自分の変わった部分について考えを深め、外国語を学ぶ意義について考えてほしいと考えた。そしてそこからまとめられた答えが1回目レポート「日本語と私」の最後の部分になる予定であった。しかし、実際は「日本語を教えるアルバイトでお金がたくさんもらえた。」などの答えが多く、自分の内面について変わったことについて話を深めて行くことができなかった。このように自分を取り巻く出来事から自分の内面へと思考を深めていくにはどのような活動を行うべきであるかということとは今回の実践での大きな課題となった。

## 6.3 授業後の雑談から

授業に参加した日本人留学生は学生同士ということもあって、この授業をきっかけで友達になり、その後日本語科の学生と旅行に行ったりしたグループもあった。今回の授業のような日本人と知り合う機会を作ることも教師の重要な役目ではないかと思う。しかし日本人学生とタイ人学生が授業外では必ずしも日本語を使っているとは限らない。タイ人学生の方は留学に来ている日本人学生のためにタイ語を使うことも多いようである。しかし、実際にこのような形で日本人と接することは文化リテラシーの育成にとっても有益なことであると思われるので、今後もこのような機会を多く設けて行きたい。

## 6.4 日本人留学生から

日本人留学生には毎回授業後に今日の授業について感じたことを自由に話してもらう時間を設けた。その中で聞かれた意見として以下のようなものがあった。

- 1) 学生の日本語をどのくらい直したらいいのか。また、学生が聞いてくる文法的な質問についてどこまで答えたらいいのか。
- 2) 自分も学生としての参加者なので、どのくらいグループをコントロールしていいのか。日本語を使つてのディスカッションではどうしても自分が中心になってしまう。また、自分と話していない人がディスカッションに参加せず、気がつくと1対1の話し合いを順番にしているだけになってしまっていた。
- 3) 内容によっては自分も考えたことのないことだったので、何を話してよいかわからなかった。

1) については担当者の説明の方法に問題があったものと思われる。日本人留学生には毎回授業の前日までにEメールで実施する活動についての説明を行った。しかし、日本人留学生にとっても初めてのことであるので、事前の説明を読んでもなかなかイメージが湧かなかったようである。グループ活動中の介入は極力避けようと考えていたが、学生が戸惑っている様子がわかる時には積極的に介入し、具体的な方法を実際に見せることが必要ではないかと思う。

2) は担当者の観察からもしばしば確認されたことである。ディスカッション内容の関心の有無によって学生の意欲も様々であった。ディスカッションの流れについてはグループごとに任せきりにするのではなく、話の進め方についてシートにメモなどをさせながら細かく指示をしていく必要があるのではないか。担当者が直接前面に出ないこのようなスタイルの授業では、全員が自然にディスカッションに参加できるような仕掛けを準備することが担当者の腕の見せ所であると思う。

3) については、だれでもあることについて初めからはっきりした考えを持っていることは少ないのではないかと思う。考えというものは他者に話し、何らかのフィードバックを得ていく過程で次第にはっきりしていくものである。この授業で目指したものはまさにこの過程あり、日本人であるからといって初めからはっきりした考えを述べる必要はない。日本人留学生はタイ人学生の学習支援者ではない。あくまでも対等な立場で思考する人間同士であるというのがこの授業の考え方である。また、この授業をはじめる前に日本人参加者の募集を行なう際、「日本人ボランティア募集」ということばを使わずに「日本語コミュニケ－ター募集」としたのもこのような考え方からである。

## 6.5 授業後のアンケート調査から

授業の最後に自由記述式のアンケートをした。以下はその中で見られたコメントである。

- 1) 友達の作文が読めて楽しかった。わたしは書くのが好きなのでこの授業が好きです。
- 2) 話し言葉をたくさん使っています。友達と話して楽しいです。間違えても大丈夫です。
- 3) 日本人に意見を聞いて新しい経験を得ました。自分の考え方を表わせてよかったです。
- 4) 先生はいつも「詳しく書いてください」と言いましたから、考え方が増えました。

- 5) 宿題がたくさんあって大変です。作文のタイトルが難しい。考えにくい。
- 6) この授業は会話の授業だけど、会話より作文を書くほうが多かったです。
- 7) 作文が正しいかどうかわかりません。同じことを2、3まいに書く。つまらない。
- 8) ととき先生先生の質問が難しいです。その質問はタイ語でも答えにくいです。

1) から 4) まではよかったという意見である。2) については間違いを気にせずに伝えたい事を自由に話すというこの授業の目的が達せられたと感じられる意見であった。また、4) のように考えるきっかけになったという意見もあった。5) から 8) まではよくなかったという意見である。6) の意見についてはこの授業の目的はレポートを書く事ではなく、その過程の話し合いであるという担当者の意図が伝わっていなかったものと思われる。7) も同様に、書いているのはひとつのテーマについてであっても「同じこと」ではないはずである。このような授業の流れと目的の説明については今後の課題としたい。

8) の「タイ語でも答えにくい」というのは「外国語を学ぶ意味」などの質問についての意見であると思う。学生にとっては苦しい作業であったと思うが、このように今まで考えたことのないことを考えて、表現するというのがこの授業の目的である。

## 7. 授業の問題点と今後の課題

「6 授業の反応」から明らかになった問題点を今後の課題としたい。

### 7.1 タイ語の使用について

授業中にどのくらいタイ語の使用を許容するかというのは、毎回の授業の目的によっても変わってくるのではないと思う。しかしディスカッションの内容が難しいと感じられた時は、タイ語での話し合いをさせるほうがよい場合もあるのではないか。日本人留学生もある程度タイ語ができるので、この授業の平等な立場で思考する人間同士という考えからもタイ語の使用は目的と時間の管理を担当者が意識的に行なえば問題ないのではないかと考える。

### 7.2 日本人留学生への説明

「総合」について知らない日本人留学生に参加してもらい、共によい授業を作っていくためには事前の説明はもちろん、活動中に適宜担当者がグループに入って、こちらがしてもらいたいことを実際に見せることが重要である。また、タイ人学生の日本語学習を手伝うという意識から脱却してもらうための説明も重要である。今回は日本人留学生にもタイ人学生と同様のレポートを書いてもらうことを意図していたが、実際にレポートを書いた日本人留学生は1名のみであった。これは日本人留学生がタイ語学習などで多忙なこともあるが、やはり担当者としては相互のレポートについてインターアクションしながら考えを深めていける授業を目標にしていきたい。

### 7.3 タイ人学生への説明

タイ人学生にとっては、このような決まった教材のない、しかも内容も自分で決める授業は初

めてで、戸惑う学生が多かった。「今、何をすればいいですか。」という質問が学期を通して何度もあった。学生が主体的に考えて活動を行なっていくためには、なぜこのような授業をするのかという目的を明確にし、そのために今日はどんな活動をするのかという説明を常に行う必要がある。また2回目のレポート「〇〇と私」では選んだトピック、例えば「かばんと私」など趣味に関するものについては思考が深まらないものもあるようだった。そのようなトピックを選んだ学生は授業中の活動にも苦勞しているようであった。トピックについてはいつでも変更ができるという説明をもっと明確にするべきであった。

#### 7.4 ディスカッションの方法について

担当者はディスカッションの内容をどのように深めて行くかという方法についても検討する必要がある。たとえば「ワンさんと私」というテーマで話を始めたある学生は、韓国旅行でワンさんという人に会って、よい友達になれたということを話していた。これに対して他の学生はワンさんについての質問以外に「韓国の料理はおいしいですか。」などの旅行についての質問も多く出て、話の流れが一定の方向にまとまらなかった。話し合いとしてはいろいろな話題が出て、話が盛り上がり、学生もたくさん話しができて満足したようであった。

しかし、ここでその学生が友達について話しているのであれば、他の学生にも友達についての質問をするように話の方向を導いていく必要がある。つまり、常にその人の一番言いたいことに注目してディスカッションを進めていくべきであり、学生がこのような方法に慣れるまでは担当者の積極的な介入が必要である。この活動で難しいと感じたのはこのように話者の正しい意図を的確につかみ、その方向に話を進めることであった。

#### 7.5 非日本語環境での文化リテラシーの育成について

先に挙げた学生からの意見「日本人はタイにいて、タイ語を勉強しているのだからいろいろ変わることはあるが、私たちはタイにいて日本語を勉強しているのだから変わったことは特にない。」については詳細に検討する必要がある。非日本語環境下では学習者は本当に何も変わらないのだろうか。また、変わるのだとしたらどんなところがどのように変わるのだろうか。筆者はこの変化についての気づきが文化リテラシーの育成と深く関わっているのではないかと考えている。また短期的には日本人留学生とのインターアクションの過程で自分の考えがどのように変わったのかを意識化できるような授業デザインをしていきたいと思う。

#### 7.6 その他

その他の問題点として評価の問題がある。これは担当者個人だけでは解決できない部分もあるが、授業に参加している全員が納得できるような評価の方法を工夫する必要がある。また、早稲田大学日本語教育研究教育センターですでに行われているような授業時間以外でもいつでも意見の交換ができるBBSの活用なども検討していきたい。

## 8. さいごに

このように様々な問題がありながらも、全体としては、学生のアウツプットの量が増えた、自分の経験をもとに、ものごとについて具体的に話せるようになったなどの変化が見られた。また日本企業の面接では「あなたはどんな人ですか。」という質問をされ、この時に自分について考えるこの授業が役に立ったという声も聞いた。今後も今回の実践で明らかになった課題についての分析を詳細に行い改善を加え、来年度以降も「総合」を続けていきたい。

またこの「総合」について関心のある方、自分の勤務先でも「総合」を実践してみたいと考えている方と連絡を取りながら、これを進めていけたらと考えている。関心のある方はぜひ筆者までご一報いただきたい。(takahiromjp@yahoo.co.jp)

また NPO「言語文化教育研究所」ユビキタス講座「言語文化教育入門」では細川英雄先生、講座参加者の皆さんからこの実践を行うに当たってのさまざまなヒントを頂くことができた。この場でお礼を申し上げる次第である。

## 参考文献

- 細川英雄（2002）『日本語教育は何を目指すか 言語文化活動の理論と実践』明石書店  
細川英雄＋NPO 法人 言語文化研究所スタッフ（2004）『考えるための日本語』明石書店  
早稲田大学日本語教育研究教育センター（2003）『「総合」の考え方と実践』早稲田大学事業部